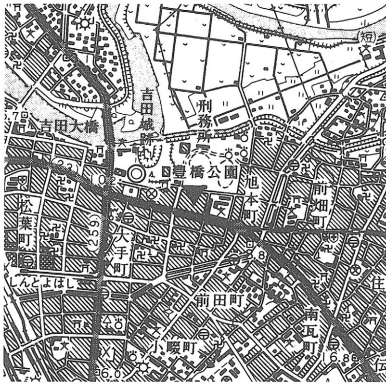


愛知・吉田城址

よしだじょう

- 1 所在地 愛知県豊橋市今橋町
- 2 調査期間 第二次調査 二〇〇四年(平16)九月〜一〇月
- 3 発掘機関 豊橋市教育委員会
- 4 調査担当者 小林久彦(豊橋市美術博物館)
- 5 遺跡の種類 城郭跡
- 6 遺跡の年代 中世・近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(浜松)

吉田城は、永正二年(一五〇五)、豊川下流域右岸を本拠とする国人領主牧野氏によって築城された今橋城を前身とし、その後吉田城と改称されたものである。

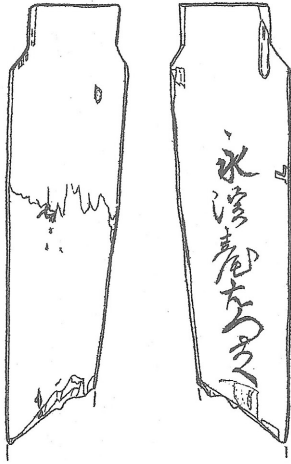
豊川下流域のほぼ中心部で、街道や河川の要衝に位置するこの城は、戦国期を通じて東三河支配の要であった。松平(徳川)家康の東三河平定、さらに家康の関東移封に伴う池田照(輝)政の入城に際して、大がかり

な改修が加えられ、近世城郭として発展を遂げた。近世にはやはり東三河地域の支配の要として、三〜八万石の譜代大名が入城した。

近世の吉田城は、面積八四万㎡にも及ぶ広大な城域をもっていた。豊川を背にして、本丸を中心に二の丸、三の丸、さらに藩士の屋敷地が取り囲み、全体を総構で区画した構造である。基本的に土造りの城であって、石垣は本丸の周辺と主要な門だけに設けられていた。城下は城の外側に展開しており、また城の外周には東海道が通るため、宿場町としてもにぎわった。

今回の調査では、近世の区画溝をはじめ、掘立柱建物、井戸、土坑、多数の柱穴が確認された。調査区は、幕末に描かれた「吉田藩士屋敷図」(豊橋市美術博物館蔵)によれば、「沢平八」の屋敷地内に相当する。沢平八は、詳細は不明ながら、屋敷地の規模から言えば中級の藩士とみられる。また、付近は伊勢神宮領である飽海神戸または吉田御園の比定地でもあり、中世前期の遺構も検出された。

木簡は、城址の南側付近、近世の藩士屋敷地内の井戸(C-3区SE-06)から一点出土した。この井戸は、調査区の南東寄り、屋敷地の推定位置からいえばその中央やや南東寄りに位置している。平面形は楕円形で、規模は長径三・〇m短径二・五m、深さは検出面から二・九mである。素掘りの井戸で、井戸枠などは存在しない。ここからは瀬戸・美濃産陶器、常滑産陶器、肥前産陶磁器、在地産土師器、瓦、木製品が出土しており、それらの帰属時期である一七



世紀から一八世紀中葉までが井戸の使用期間を示すと考えられる。
8 木簡の积文・内容

(1) ・「<永濱台右衛門殿



(222)×59×7 039

上部に切り込みをもち、下に向かって幅を狭めている。下端は欠損する。一面に宛先とみられる墨書があり、反対面にも墨書があるが判読できない。ここでは判読できる宛先の書かれた面を表と考える。屋敷地に納入された物資に付属したものと思われる。ちなみに、「吉田藩土屋敷図」中には永浜姓を見いだせない。

吉田城址では、このほかにも城内の三の丸に所在した井戸から近世の木簡が一点出土している。こちらは現在報告書作成に向けた整理作業の途中のため、時期を改めて報告することとした。

(岩原 剛〈豊橋市美術館〉)